

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第148回 例会 2020年11月12日

《世界の行く末を考える—米国大統領選挙の結果を見て》

「いやはや前代未聞のアメリカ大統領選挙の経過と結果、さらに結末がどうなるのか。日本の選挙も、こんなに白熱するといいのという感想もあるが、ともかく日本の報道も含め、様々な教訓をもたらした選挙でしたね。」

問題提起 吉田千秋(主宰)

- ・ようこそ。皆さんの参加を嬉しく思います。コロナ・ウイルスの感染が全国的にまた拡大し状況が悪くなっています。個人的に大丈夫だと思っても、気を緩めないで注意する必要があります。ヨーロッパやアメリカではもっとひどいことになっていて、第一次の感染拡大を上回る勢いで、感染者が急増しています。そんな中で、世界中が注目する大統領選挙がアメリカで行われました。異様な熱気の中、激しい選挙戦が展開され、アメリカの外から見ていて、面白いと感じた人も少なくなかったでしょう。
- ・最大の争点は、やはりコロナ問題だったでしょう。トランプ大統領は経済を優先させ、コロナ感染を風邪に例えて問題の重大性を認めない態度を崩しませんでした。予防対策を怠ってトランプ氏自身を含めホワイトハウス関係者が多数感染する事態に至っても、コロナは怖くないという態度を改めず、コロナ・ウイルスを感染症の発生源と推測される「中国のウイルス」と呼んで問題の責任は中国にあると言い続けました。自らが対策を怠っている事を棚に上げて、中国に操られていると世界の感染症対策を担うWHO(世界保健機構)を非難して離脱してしまいました。
- ・対する民主党の大統領候補のバイデン氏は、コロナ問題を最重要課題と位置付け、対照的な態度を示していました。アメリカと経済貿易問題で対立している中国は、人権に配慮せねばならない西側世界では実施できない強引な手法で、感染症を抑え込んで、経済をコロナ前の状態に回復させることに成功しています。毎年、消費活動が活発になる“独身の日”には、これまでにない大商戦が展開されました。アメリカ第一主義を掲げるトランプ氏は、ここ数年、中国を政治的、経済的な脅威と見なし、中国製品により高い関税をかけたり、5Gの様な次世代技術に関連する事業の入札から中国企業を締め出すなど中国に対する締め付けを強化してきました。環境問題では、トランプ氏は温暖化対策を求める人々を揶揄したり、自らの再選を念頭に、経済活動を優先させ、ひたすら雇用ありきの姿勢を貫こうとしていました。
- ・それに対してバイデン氏は、当初より、環境重視の姿勢を示し、温暖化問題を取り上げ、石油や天然ガスへの依存を

脱して社会の脱炭素化を目指すことを公約に掲げていました。トランプ氏は、それを逆手にとって、バイデン氏が大統領になれば、石油やガスの関連事業の雇用が失われると批判して、選挙戦終盤、若干民主党支持の切り崩しに成功したと言われていました。それもあって、バイデン氏圧勝の下馬評を覆して、選挙戦は大接戦となりました。



- ・もう一つの争点は黒人差別を始めとする人種問題でした。以前より黒人は日常的に不当に容疑の対象にされると言われていました。今年に入って警察による暴力的な対応の犠牲となって黒人が死亡する事件が全米各地で相次ぎました。そのため、黒人市民の不満が一気に爆発して、様々な場所で“ブラック・ライブズ・マター”(黒人の命も大切)を掲げる人々の抗議活動が展開されました。
- ・トランプ氏は抗議活動に伴って起きた暴力沙汰を非難するばかりで、人種差別の問題には冷淡な態度しか示しませんでした。人種問題に無関心であっただけではありません。大統領就任以来、トランプ氏は中南米からの移民を中傷する発言を繰り返していました。それ以外にも、白人労働者を意識した政策が目立っていました。前回の選挙では、不法移民の流入を阻止することを目的に、メキシコ国境に高い壁を作るということが最も重要な選挙公約となっていました。増加し続ける中南米からの移民を犯罪者呼ばわりして、意識的に反移民の空気を煽って、移民国家であるアメリカ社会の分断を深めたトランプ氏の責任は重大です。
- ・対するバイデン氏はアメリカ社会の多様性を重視し、差別を批判して、人種や宗教の違いを越えて同じアメリカ国民

- としての団結することの重要性を訴えていました。トランプ氏の様に力で抑え付けようとするのではなく、話し合っ、和解の道を探る姿勢が今後欠かせないものとなるでしょう。アメリカの民主党は左右の幅の広い政党です。社会民主主義者を自称するバーニー・サンダース氏が、若者や労働者層の支持を集めることにも明らかな様に、民主党内では左派グループが大きな影響力を持つ様になっています。民主党内の主流派は、トランプ氏や共和党からの社会主義批判によって、中間層の支持を失うことを恐れていました。アメリカでは社会主義と聞けば、個人の自由を認めない全体主義を連想する人が少なくありません。結局、穏健なバイデン氏が民主党の大統領候補となりましたが、党内の左派の支持を取り付けるために、バイデン氏は幾つかの左派の求める政策を選挙公約に取り入れていました。
- ・バイデン氏が副大統領候補に女性でアジア系黒人のカマラ・ハリス氏(父親はジャマイカ、母親はインド出身)を選んだことは評価に値します。人種問題を考慮するなら、アメリカ社会の多様性を象徴する女性が副大統領になることには、なお一層の大きな意義があると言えます。2016年の大統領候補、ヒラリー・クリントン氏が保守層の激しい反発を招いたことと対照的に、ハリス氏の指名は全般的に好意的に受け止められています。上院のウクライナ疑惑の公聴会で、元検察官のハリス氏は召喚された参考人を鋭い切り込みで追及していました。バイデン氏勝利宣言のイベント冒頭の挨拶でも、ハリス氏は、政治の世界における苦難に満ちた女性の歩みを振り返って、今後一層、女性が重要な役割を演じる可能性を強調し、今回の勝利の意義を訴えていました。
 - ・トランプ氏は選挙戦終盤、全米でコロナ感染が著しい拡大を見せる中、疫学的にリスクを顧みず、密接・密集の選挙集会を連発していました。無責任と言える行動を繰り返

して、岩盤支持層の動員に成功しましたが、バイデン氏が逃げ切りに成功して、選挙に勝つことはできませんでした。アメリカの大統領選は、毎回大きな盛り上がりを見せる、4年間を通じたお祭りの様な政治イベントです。状況が違うが、日本でも多数の国民を動員する政治が行われる必要があるでしょう。

- ・トランプ氏の家族(妻及び娘)は説得している様ですが、当人は慣例となっている敗北宣言を拒み続けていて、バイデン氏は一方的な勝利宣言を余儀なくされました。しかし、新しい政権の誕生は動かないと思います。私たちが考えなければならないことは、バイデン氏の下で、世界はどうか、日本にどのような影響があるのかという問題です。第二次大戦後、アメリカは一国で世界の富の6割を占める圧倒的な地位を占めていました。良し悪しは別に、戦後の世界で国際問題の解決にアメリカはリーダーシップを発揮してきました。貿易(自由貿易)や政治に関する世界の秩序はアメリカ主導で作られたものです。アメリカ第一を掲げ、既存の国際秩序を変えようとするのは、アメリカ自らの立場を弱め、没落を招くだけの事に終わるでしょう。バイデン氏は大統領として今後世界経済や政治におけるアメリカのリーダーシップを回復させることができるでしょうか。
 - ・安倍前首相は、中国や北朝鮮に対する対応でアメリカに振り回されながら、異議を唱えずトランプ大統領に擦り寄ってきました。菅現首相も同じ路線を進もうとしていました。バイデン氏は、対中強硬派だとも言われていますが、東アジアの問題にどう対応するでしょうか。トランプ氏ほど強引であからさまでなくとも、バイデン氏が思いやり予算の増額を求めて来る可能性も十分考えられます。
- 今日は、まだ印象も新しい大統領選を念頭に、意見なり感想なり、思っていることを出し合うことができれば良いと思います

意見交流

- * 先ず選挙制度に疑問を感じる。全体の得票数で多数を占めた者が勝たないことがあって良いのか。勝った方が割り当てられた選挙人を総取りすることに問題がある。全体で多数を占めた候補に投票した者は、支持した候補が敗者となった場合、納得できないのではないのか。なぜそのような仕組みになっているのか。
- * 米国は、合衆国(州の連合体)である。各州に割り当てられている選挙人の数は、各州から連邦議会に選出される議員の数に等しい。上院は州の大小に関係なく議員の数は二名となっている。人口3千8百万人のカリフォルニアも、58万人のワイオミングも上院議員の数は同じである。それに対して、下院は州の人口に応じて議員数が決ま

る。カリフォルニアは53人で、ワイオミングは1人である。投票は州単位で行われて、その結果が州の意思となる。それは州の独立性を表している。それはそれなりに合理性がある。

- * 確かに州の独立性は強い。英国の植民地であった13の州が一緒に本国と戦って独立を獲得した。先ず州があって、次に州が集まって連邦ができた。司法制度も州ごとに違って、死刑制度は合法と認められているが、死刑制度を廃止している州も多い。また各州が州兵と呼ばれる軍隊を持っている。だが、ネブラスカとメイン州など、総取りでない州もある。
- * アングロサクソン系は小選挙区制を好む傾向がある。これ



は勝敗をはっきりさせたいという民族性の表れだと思う。日本は以前、同じ選挙区から複数の候補が議席を獲得する、ちょうど小選挙区と比例代表を融合した様な微妙な中選挙区制で議員を選んでいた。

- * トランプ氏は敗北を認めようとしな。結果が覆る見込みが無いのに、誰の目にも悪足掻きに過ぎないことをやっている。駄々をこねる子どもの様で見苦しい。
- * 米国の分断は深刻だ。バイデン氏は融和を訴えるが、困難ではないか。バイデン氏は勝利したが、地図を見ると面積的に広い赤色の地域が目立つ。都市部は民主党で郊外、田園地帯は共和党にはっきり分かれる。米国は社会がバラバラになって国力を衰えさせるだろう。米国の未来は明るくない。世界政治の中心は中国を代表とするアジアに移って来るのではないか。分断は米国だけでなく、先進国には何れの国にも当てはまる。
- * 分断と聞くと、非常に否定的に聞こえる。米国は元来まったく異なるものが集まって併存する国としてやってきた。寄せ集めの様に見えること自体は全然、新しいことではない。アメリカ合衆国は、世界中から集まった異なる様々なものが同居する多様性を活力に変えて成長して来た国である。もちろん奴隷貿易が南部の慢性的な労働力不足を補って来たことはアメリカの負の歴史でもある。移民の流入は現在まで続いていて、途絶えたことは無い。この20年を見ても、アメリカは、毎年、100万人前後の移民を受け入れている。トランプ氏は、イスラム教徒や中南米の人たちを犯罪や貧困をもたらす者たちと呼んで、侮蔑的発言を繰り返し、移民がアメリカにとって脅威であるかのような印象を与えた。社会の変化を恐れ、白人優位の過去にしがみつく支持層を意識した発言で、移民の過去を持つマイノリティーの人たちを憤慨させ、分断を煽るトランプ氏のやり方は極めて危ういものである。実際、この間、合法的にアメリカに流入する移民の数は減った訳ではない。アメリカの発展を支えて来たのはこうした移民の存在であることを忘れてはいけない。
- * 余りに無策でコロナ感染の拡大を阻止できなかったことが、結果として、トランプ大統領の再選を阻むことになった。気候変動など数々の大きな課題を考えると、バイデン氏が勝利しトランプ氏が大統領でなくなることを歓迎したい。そもそもなぜこういう異端者の様な人が支持を集め、

選ばれたのか理解できない。一部で盛り上がっているが、アメリカ人は全般に政治に無関心で、選挙での投票率は低いという印象がある。

- * 決してそういうことはない。今回の選挙に関して言えば、投票率は66.4%で、この数字はこの100年で最高の結果である。日本の衆院選は近年、投票率60%程度に留まっている。米国と日本の大きな違いは、米国では、非常に多くの市民がボランティアで支持する候補の選挙戦に積極的に参加する。日本では一般市民は、極めて受動的で、投票所に行って票を投ずるだけである。
- * アメリカン・ドリームと呼ばれるものがある。「頑張れば、自分の努力でどんな夢も現実とすることができる国である」というものである。言い換えれば、アメリカは、ゼロから出発して成功を収めることを夢見て、集まって出来た国である。自由主義の精神の表れと言っても好い。元来、多くのアメリカ人は、サンダース氏が訴える社会福祉の様な社会主義的なものに否定的な考えを持っている。しかしながら、トランプ氏の様な人物を支持する人がいることは驚きである。アメリカは大統領がコロナ感染の問題を軽んじて、悲惨なことになっている。
- * アメリカでは、高額の民間の医療保険しか存在せず、保険未加入者の多い状況が以前より問題視していた。前任者のオバマ氏は、国民皆保険を目標に、公的医療保険制度を導入しようとした。かなりの妥協を迫られたが、何とか、公的医療保険制度のたち上げにこぎつけた。トランプ氏は、公的な補助金の支払いを制限するなど、医療保健制度を骨抜きにすることに躍起となった。完璧ではないにせよ、国民皆保険が現実である日本では、幸い誰でも医療サービスを受けることができる。バイデン氏はトランプ大統領の政策を転換してオバマケアを拡充することを公約に掲げていた。
- * アメリカの人たちの考えの中で、自由と私有財産と自己責任が一つにつながっている。そこから、「努力で夢を掴む」という発想が出て来る。トランプ氏によって、メキシコ国境を越えて入って来る不法移民の問題が大きく取り上げられた。それまで放置されていた訳ではなかったが、元々、アメリカは不法移民がはいって来ても、遣って行ける国だった。アメリカは移民を受け入れることで、周辺国や、世界各地の貧困を吸収する国だったとも言える。トランプ支持が堅い理由は、トランプ氏が海外の競争相手に押されて衰えが目立つアメリカの産業を復活させ雇用を作るといって、ある程度その期待に応えた実績があるからである。ただ問題はそのやり方で、アメリカファーストを掲げ、かつてアメリカ政府によって承認された貿易協定を無視して、他国の不利益を顧みず、一方的に外国からの輸入製品に高い関税をかけたり、関税をかけると脅して該当する企業にアメリカ国内に工場を作れと強引に迫った。多くの白人労働者は、マイノリティーの保護を生み

- だした社会の多様化や経済のグローバル化の中で、既成の政治エリートたちから置き去りにされたと感じている。トランプ氏はこうした人たちを動員することに成功した。分断の解消は容易ではない。
- * アメリカ人は全般に環境問題に対する意識が薄い様に思われる。温暖化対策を訴えるよりも、雇用創出を掲げた方が票の獲得に繋がる。
 - * バイデン氏はパリ協定に復帰して温室効果ガスの排出を2050年までにゼロにすることを約した。でも原発に依存する形で削減することはして欲しくない。
 - * 選挙戦を見ていてアメリカはすごい国だと思った。自分はバイデン氏が圧勝すると思っていた。トランプ氏は敗れたが、バイデン圧勝の当初の予想を覆して、頑張ったのではないか。投票結果だまだに確定せず、随分、非効率的なことを遣って、騒いでいる様にも見える。選挙制度が問題ではないか。
 - * トランプ氏はアメリカ第一主義を掲げた。他国の事情を無視して、既存の協定を蔑にして強引に条件を突きつける。長い目で見てこれが本当にアメリカの利益になるのかは疑問である。バイデン氏はもっと広い視野で考えている様に見える。
 - * 視点を変えれば、トランプ氏の評価は変わる。立場によって見方は異なる。トランプ氏を支持する人たちを見下してはいけない。
 - * トランプ氏はヨーロッパの大半の国で嫌われている。NATOを時代遅れと言って、同盟国の首脳を困惑させたり、イギリスのEU離脱問題で、公然と離脱派に肩入れしたり、アメリカ自らが努力して長い交渉の末合意に達して、更に国連の議決で国際的承認まで得ていたイラン核合意を一方的に離脱して、関係国の首脳を唾然とさせたり、難民や移民の排除を掲げる排外主義の極右勢力に共感を示したり、守るべき国際慣行をあからさまに無視したことが影響している。
 - * 罵り合いの輪に50代、60代の人たちがいることに驚きを感じる。日本なら分別があって当然と見なされる年齢の人たちである。
- * 宗教は何よりも神を信じるのが根本にある。信じるのが先あって、考えて根拠に基づいた結論を信じるのではない。科学は確かと言える個々の事実を分析検証し、認識を論理的に積み上げて結論に達する。多くの者の政治に対する関わり方は、宗教に近いものがある。教育の格差があるかもしれない。自分の信じたものだけを信じる。トランプ氏のお気に入りにはFoxテレビである。アメリカではケーブルテレビが普及していて、多くの者が見たいものだけを見る。トランプ氏にとっては、彼が信じることは常に正しいことである。メディアはトランプ氏の嘘をその都度検証して来たが、彼の支持者に言わせれば、メディアこそ嘘を吐いて、トランプ氏を貶しめようとしていることになる。選挙結果を見れば、トランプの嘘を拒否する人が多くなったことになる。
 - * 何を信じて好いか分からない。メディアを信じて好いのか。どのメディアが信じるに値するのか。インターネットの世界は情報が氾濫している。根拠に基づいた情報なのか、フェイクニュースなのか。どうやって見分ければ好いのか。
 - * 世界がこれからどうなるかを考えると不安になる。多くの人は5Gがどうのこうのと言っている。これまでより格段に多くの情報を運ぶことができることを、当たり前の様に、この上なく素晴らしいことだと考えているらしい。人間がますます自然から遠ざかる様に思われてならない。アメリカの大統領選はバイデン氏が勝って、取りあえず良かったと思う。
 - * 中産階級の経済的な没落は社会の安定を損なう。かつてアメリカ経済の土台であった、五大湖周辺の工業地帯は衰退してラストベルトと化した。政治の関心はIT技術に基づいた新しい産業に向けられた。ラストベルトの白人労働者は置き去りにされたと感じていた。中高年の白人労働者は、移民社会の未来を拒否し、移民の排斥を訴えるトランプ氏の中に代弁者を見出したと信じた。グローバル化の進行の中、人々の考え方は左右に両極化する。日本でも、格差拡大や経済の低迷によって階級的対立が深まる恐れがある。

意見交流の最後に 吉田千秋

・今日の意見の交換に二、三付け加えたいと思います。アメリカはどういう国なのでしょう。一つは、明の最先端というイメージが長らく続いていましたが、実はなかなか強い宗教社会で、「非文明」社会の側面を持っていることです。アメリカは母国イギリスにおける迫害を逃れ宗教的自由を得るために、海を渡ったピューリタン(清教徒)たちが作った国で

す。キリスト教の宗派はカトリック、プロテスタント、東方教会と大きく三つに分かれますが、アメリカ社会がキリスト教の信仰を重視する宗教社会であることに変わりありません。世俗化が進むヨーロッパに比べ、いまだにアメリカには日曜日に教会へ礼拝に出かける人が沢山います。割合的にはプロテスタントが多数を占め、バイデン氏はカトリックです

が、カトリックで大統領になったのは、過去にケネディー氏がいるだけです。

・中でも極めて保守的な世界観を持つ福音派と呼ばれる人々が政治に大きな影響を及ぼしていると言われていいます。私たちは、アメリカと言えば科学技術の国と考えますが、実は信仰を重んじる宗教的な国でもあります。進化論を聖書の教えに反すると学校で教えることを拒否する州もあります。信仰の力は科学的思考より強いものです。宗教的なものは元来、民主主義になじまない要素で、本質的に議論や多数決の対象になることを許しません。銃規制がアメリカでできない「非文明」性も、この問題と関連している様に思われます。

・もう一つ、アメリカは人種のるつぼで、異なる様々な人種、民族、宗教が時に反発し合いながら共存している社会です。アメリカの歴史は、全体として見れば、互いの違いを認め合って、多様性を長所に変えて発展する歴史でした。人間の多様性を通じて、アメリカの民主主義は鍛えられたとすることもできます。大統領選挙のテレビ報道を見ていて、感心したことがあります。開票が進んで、バイデン氏優位がはっきりしてきた状況で、トランプ氏はテレビ中継が行われているホワイトハウスの会見の席で、自分は選挙に勝ったと発言しました。アメリカの主要ネットワークは一斉に中継を打ち切って、発言は事実に基づいていないとコメン



トして、気骨のある報道姿勢を示しました。残念ながら、日本の報道は情報バラエティーと化して、専ら票読みを面白がっているだけに見えませんでした。日本のメディアで政策が論ぜられることは稀になっています。日本メディアの劣化が心配されます。

・日本では国民を無視して政治が行われていると思えてなりません。政府の議会軽視は相変わらずです。新首相の菅氏は根拠を示さず既成事実を積み重ね政治を進める安倍氏の手法をすっかりそのまま継承した様です。民主主義は国民の代表がしっかり議論しなければ形骸化して、中味の無いものになってしまいます。意見をぶつけ合って議論するアメリカから学ぶことはまだ沢山あると感じました。今後、世界がどうなっていくのか予測することは容易ではありません。であるから私たちはよけいに、無関心にならないで状況を捉えながら前向きに歩みたいと思います。

みなさんの感想など

・(事前投稿)「哲学カフェ通信」をお送りいただきありがとうございました。

アメリカの大統領選挙では、バイデンが勝って世界は最悪の事態は免れました。しかし、新自由主義下での格差問題、デジタルの進展の行方、さらには今後ますます激しくなるであろう米中の経済のみならず覇権をめぐる争いは予断を許しません。

問題は、日本の立ち位置です。菅首相は「日米同盟」を盛んに発言しています。しかし、現在の日米同盟は、「同盟」には値せず、世界に類を見ない「従属関係」です。さらに彼は、日本学術会議問題にみられるように、安倍政治の踏襲というより、安倍悪政の露骨な具現化に走っています。安倍の頃に画策した「学問、自由」への介入をあらわにしました。そのキーマンの杉田副長官は、戦前の特高を引き継ぐ公安畑の出身で、霞が関を支配するラスプーチンのような存在と言われます。日本は何という国になってしまったのでしょうか。

このとんでもない状況下でのNHK世論調査で、菅内閣の支持率が上がりました。戦前を思わせる状況です。ポ

ピュリズムのなせる業かと思いますが、それに対抗するためには、真の教育によって個人の学問、思想の涵養が必要だと思いますが、現実には質、量ともには全く逆方向へ進んでいます。今回の件もその一連の流れだと思います。安倍内閣以来、一貫して行われてきた教育の改悪がいよいよ仕上げの段階と思わせる事態です。

アメリカも今後はどうなるかわかりませんが、今回の選挙を通じて流石と思いました。選挙に係わる国民の熱狂、制限付きではあるものの三権分立の存在、さらには、マスメディアの本来の役目である権力の監視と戦い、女性副大統領の誕生は彼我の政治状況を比べれば、マッカーサーに「政治的には12歳」と言われた時代よりも後退すらしているかのようです。
(名古屋:Shigeaki)

・毎回のんびりして感想文の締め切りに間に合わずすみません。今回からすぐ書くことにします！千秋さんの総括にうなづきながら聞きました。私は、互いに違う意見が分断を生み、武装するという行動にびっくりしました。文化人のすること？先進国なの？と…。マスコミの断片的な色眼鏡のついた情報を受け取る難しさを感じました。情報を信じすぎる

のも愚かであるが、信じないのも愚かであるなんて言葉を聞いたことがあるような…。

私は、物事を様々な角度から見た意見を聞くと、なるほど！と感心します。視野が広がり考えが深まります。自分の意見が最もではなく、角度が違えば見方も違うので、「このことから私はこう思う」という発言を心掛けたいと思いました。人によって捉える視点の違いに私は楽しいと感じ、哲学カフェに参加しています。
(子猫)

・「赤い州から青い州へ、その原動力は「若い力」？」

今回のアメリカの大統領選挙をめぐって、2016年の前回と比べるとネット世代(20～30代)でバイデン票が掘り起こされ、勝利を確かなものにした、との記事がある(在米ジャーナリスト津山恵子氏)。それによれば、40代以上の世代はほぼ半々トランプとバイデンに投票したのに対して、この若い世代は投票率が45%から58%へと増えた上に、「前者に投票」が35%、「後者に投票」が62%、というデータがそれを示している、と述べている。もちろん彼らの多くは多様性を認め合うことが当たり前の都市部に住み、ネットやSNSに慣れ親しみ、ファクトチェックなども仲間とのつながりの中でできる、リベラル志向の若者たちなのだ、とも。

さらに、こうした新しい流れが顕在化する過程で、キーとなった人物の一人として黒人女性エイブラム氏を挙げている。氏は2年前ジョージア州知事選に立候補し共和党候補に敗れたが、その後若者の有権者登録を支援する市民活動に取り組み、今回80万人の新たな若者を投票行動へと導き、今回の結果に貢献したという。

そしてその際発揮された力が、メディア・リテラシー(多様なメディアを読み書きする力)。どうやら従来のマスメディアに頼っていたのでは、ダメらしい。我々年配層は、喜んでいいのか？ さて…？
(フィリピン・ウオッチャー)

・アメリカ大統領選挙は、辛うじてバイデンが勝利しましたが、トランプの7260万という獲得投票数は今後の世界情勢をみていくうえで重要な要素だと感じます。トランプの獲得投票数が示すアメリカ社会の分断は、相当深刻で今後融和に向かうどころかまだ始まったばかりかもしれない。また全世界でこの傾向が進行する事を示している気もします。

なぜなら、例会の参加者の意見の中にもあったと思いますが、先進諸国ではだんだん中流階級が消滅しつつあります。この層の人口がある程度ないとまともな民主主義、リベラルは機能しないという社会学的な説に自分も賛同します。今後中流階級が増加する要素など皆無でしょう。従って世界的に国民の格差、分断によって生じる混乱や不安状況はひどくなる一方で世も末かなとも感じてしまいました。

(たなか)



・アメリカの大統領選挙が終わり一区切りという感じがする。だれが大統領になろうとも、日本がアメリカに隷属し、日本の独自外交が展開できていない現状では、大きな期待はできない。トランプ大統領を支持する勢力が意外に大きかったことは驚きである。しかし、サンダースの社会主義的政策を支持する勢力も台頭してきているアメリカ社会に新しい息吹を感じる。

特筆すべきは、バイデン大統領を支える副大統領として黒人系のハリス女史が登場したことである。コロナ禍の最中、ドイツ、ニュージーランド、台湾、フィンランドなど、女性リーダーたちの活躍を見ると、アメリカにも新しい可能性が期待される。それにしても、日本では男女を問わず、国際的リーダーが登場するのはいつのことであろうか。(MS)

・アメリカ大統領選挙への注目が高まる。私のような市井の一人であっても、開票がほぼ終わったらしいという朝(私の起床は3時前後)、寝床からでてすぐにネットを開いた。僅差でバイデン氏が、安心はできないがほぼバイデン氏となるだろうと思った。他国のこととして済まされない存在のリーダー選び。地球の自然・生き物すべての未来を左右する存在である。バイデン氏を選んだアメリカの人々に感謝したい。

目をうつすと中国のホンコン社会での振る舞い、人権抑圧、ウイグル自治区での蛮行、ロシアでも大統領権限の強化、米ソの代理戦争化となっている中東やアフリカの事態などなど…。その上、いよいよ宇宙へ民間ロケットで出発！宇宙の私物化はすすむのだろう。

足元では戦前のごとく学問への政権の介入があらわになる。竹中平蔵流ベーシックインカム論や、ハラリという人は「もし、人間が生産者としても消費者としても必要なくなったなら、新しいモデルとして「最低所得保障」と「最低サービス保障」という発想が生まれてくる」というらしい。(ユヴァル・ノア・ハラリ著『21 Lessons 21世紀の人類のための21の思考』P61)

目の前の社会に底知れぬ恐怖がわきおこる。連帯・協同の実践と思想の強化を思う。なんというこっちゃん、蚊がブーンと通っていく。
(尚)

＜世界一周貧乏旅 その17＞「オックスフォードサーカス(前編)」

クリスマス前のロンドン。電飾で派手に飾られた中心地の大通りは、日が落ちる時間になっても大量の観光客と買い物客で賑わっていました。通りを歩いていると突然、背後から複数の叫び声が聞こえ、振り返ると駅の方面から押し寄せる人の大群が見えました。

僕はすぐテロが起きたと思いました。この時2017年のイギリスでは悲惨なテロ事件が頻発しており、特に6月にはロンドン橋で暴走した車に複数人が轢き殺されるなど、明日またテロが起きてもおかしくないとイギリス中の人間が警戒している状況でした。

押し寄せた人の波に飲み込まれ呆然としていると、近くの靴屋の店員が「早く！こっちへ入れ！」と叫んできました。促されるまま中へ入ると、店内は同じように避難した人々が押し込まれており、店の外はパニック状態の人々が次々と走り抜けていきました。まさに背後から殺人鬼が迫ってきているというような緊迫感がありました。靴屋の店員達は一刻も早くシャッターを閉じたいらしく「閉めろ閉めろ！」「待て！まだ人がいる！」「おいお前早く！早く中へ入れ！」と相当に慌てた様子で叫んでいました。

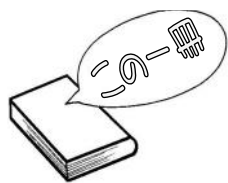
無事シャッターが閉められ安全はひとまず確保されたものの店内の不安は消えず、ましてなんの情報もない状態にあり、皆口々に「何が起きたの？」と不安な様子でした。この日はちょうど年末商戦初日で人が特に多く集まる日であり、人が集まったところを狙われるのではないかと噂されていた矢先今回の事件が起きたのです。

しばらくして外が落ち着いたらしく、シャッターが開けられすぐに家へ帰るよう促されました。通りへ出てみると人の大群はいなくなっており、困惑顔の人々がまばらに歩いているだけでした。

僕も家へ帰ろうと思い、人が押し寄せた駅と反対方向へ歩いていると、突然また人の大群が進行方向側から押し寄せ、先頭の若い男女が恐怖に駆られた様子で「あっちへ…あっちへ行ってはだめだ！殺されるぞ！」と何度も叫びながら僕の前を走り抜けて行きました。それにつられて人々は再びパニック状態になり、男女と同じ方角へ大群が一目散に走り出したのでした。

その時、僕はなぜだか恐怖心よりも事実を知りたいという気持ちが勝り、彼らの言うその『殺される』方へ行って何が起きているか確かめてみようと思いました。貧乏旅行で世界を1年間も渡り歩くなんで酔狂な人間は、危機管理能力のネジが何本か外れているようです。 ※後編へ続く

(カモノハシタニ)



クラウス・コルドン著、酒寄訳
「ベルリン3部作」
(岩波少年文庫2020年)



以前理論社から出ていた「ベルリン」3部作(「ベルリン1919」・同1933・同1945)が、今年岩波少年文庫で一挙に復活した。1919は「ドイツ革命」期を、1933はナチス政権成立期を、1945はナチス崩壊と敗戦期が主な舞台だ。

20世紀前半の歴史は、ベルリン(ドイツ)を外しては語れないし、この時代の世界史の「中心」だったとさえ言える。ドイツ革命・ワイマール憲法・ナチス・ホロコースト・第2次世界大戦などなど激動の歴史の中、ドイツの普通の人々はこの激動の歴史の渦中(特にナチスの時代)に何を考え、どう生きてきたかに強い関心があった。

その意味でこの3部作はうってつけだった。ベルリンのアクセラ通に住むある家族をとおして、作者のクラウス・コルドン

は、読者をその時々々のベルリンに連れて行ってくれる。私に関心のあるナチス絡みでいえば、第2作(1933)は、ナチスに翻弄される人々の姿が生き生きと(記録映像のヒトラー演説に、「ハイル・ヒトラー」と熱狂する人ばかりではない)描かれる。ナチス台頭を前に、反ナチスよりも互いを攻撃しあった社会民主党と共産党の悲しい争いも描かれる。そしてちょっと明るい未来の予兆も。

このベルリン3部作は少年文庫で出されているように、本来は中高生向けの作品のようだが、中高生は無論大人にもぜひ一読を勧めたい。

(井川敏郎)

2020年後半 哲学カフェ、第25期の予定

例会は19:00～21:00です。

会場は、ふれあいスペースです。

第146回例会 8月13日(木)	「コロナ危機と気候危機をつなげて考える」 *コロナ危機で、痛めつけられ、傷つけられた自然が少し「回復」した。 *「人災」の気候危機による自然破壊がコロナ危機を生み出したのではないか。	終了 しました
第147回例会 9月10日(木)	「大学入試など、日本の教育問題を考え直す」 *来年度実施予定の「大学入試改革」は、文科省の不手際、批判続出でご破算に。 *さらにこの間、教育のありかたが根本的に問い直されざるをえなくなった。。	終了 しました
第148回例会 10月8日(木)	「今後の日本の労働のあり方を考える」 *コロナ禍対策で浮上したのは「テレワーク」という「新しい様式」だけでない。 *苦境に陥れられた非正規労働者、フリーランサー等の抜本的改革が必要である	終了 しました
第149回例会 11月12日(木)	「世界の行く末を考えるー米大統領選の結果をみて」 *11月3日にアメリカの大統領選挙が行われ、トランプ再選なるかが焦点。 *この結果は、世界の政治・経済に重要な影響を与える。さてどうなるのか。	終了 しました
第150回例会 12月10日(木)	「今年はどうような年でしたか？」 *未曾有の体験を強いられたコロナ禍、私たちはどう感じ、どう過ごしたのか？ *この問題の他にも、今年も様々な事が個人的にもあったでしょう..それは？	

2021年1月第151回例会 1月14日(木) 午後7:00～9:00 「ふれあいスペース」

テーマ「世の中を明るくするためには何が必要なのか？」

*コロナ危機に陥った前年の苦闘から、明るい兆しも見えるのでは？

*さらに前進させるには何が必要で、自分には何ができるのか？ →なお、新年会は休止します。

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!! <http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>わいわいがやがや
アラカルト

★岐阜市と本巣市の境界にまたがった独立丘に、大規模な「船来山古墳群」があり、その麓にはこじんまりとした「古墳の館」があることをご存知だろうか？私は現役を退いてから7年間、この古墳館の語り部ボランティアを続けている。

★古墳館には発掘された歴史的な文化財が「宝物」のように沢山展示されており、小・中学生はもとより、一般市民にとっても日本の古代史を学ぶ学習拠点となっている。幸い、この「古墳群」は昨年、文化庁によって「国の史跡」に指定された。

★「古墳時代」には、中国から沢山の漢字が伝来し、日本の文化・文明の基礎となったことは周知の事実である。私は、「船来山」は将来、歴史的な文化公園として、「まちづくり」に役立つものと確信している。それは、岐阜県のみならず日本が誇れる文化的施設として発展する可能性があるからである。

★そこで先日、「邪馬台国」発祥の地と言われる、「吉野ケ里遺跡」を連れ合いと共に訪ねた。「女王

卑弥呼の湯」とかいう温泉につかり、古代の歴史ロマンを満喫してきた。また、コロナ禍の最中とは言え、全国からの訪問者が予想外に多く、「まちづくり」に成功している、と見受けられた。

★「まちづくり」には、Globally Thinking と Locally Doingが、重要であると思う。特に、前者は重要で、何事も地球規模で広い視野から考えなければならない昨今である。その点、この「哲学カフェ de Gifu」は格好の Globally Thinking の場であると思っている。一方、Locally Doingの基本は、「ヴ・ナロードウ(ロシア語で、民衆の中へ!)」、入り込むことではなからうか。

★「まちづくり」には歴史的資源を掘り起こし、正しい歴史観を養いたい、「不都合な歴史的事実」を隠蔽したり、歴史を抹消しようとする曲学阿世の徒を野放しにしないようにしたいものだ。

(島田幹夫)